電子版 Selection 歴史的不漁のシラスウナギ　甘い資源管理の限界

2018/3/4付 | 日本経済新聞　朝刊

国内でニホンウナギの稚魚「シラスウナギ」が歴史的な不漁に直面している。２月末時点でシラスウナギを養殖池に入れる池入れ数量（暫定値）は前年同期の約３割にとどまり、取引価格は高騰。養殖業者やウナギ店の経営を圧迫している。ニホンウナギは絶滅危惧種に指定されているが、資源管理の不備を指摘する声もある。

ウナギ養殖で100年以上の歴史がある静岡県の浜名湖。周辺には電信柱ほどの高さがあるビニールハウスが所々に立ち並ぶ。ビニールの二重構造になった内側にあるのはウナギの養殖池だ。近くを歩くとハウスを暖めるボイラーと、水の循環設備がバシャバシャと水をかく音が響き渡る。

浜名湖周辺のウナギ養殖業者は30軒ほどまで減少した

「今年のシラスウナギの仕入れ価格は去年の２倍以上。池入れの数量も全然足りない」。２月中旬に養殖業を営む経営者を訪ねると、毎週パソコンに打ち込んでいる仕入れ値と数量のデータを見ながらため息をついていた。シラスウナギは2013年にも不漁に見まわれたが「今年は以前の不漁とは比べものにならないほど数量が少ない」という。

不漁が続けば2019年の丑の日は十分な供給ができない可能性もある

シラスウナギの漁獲量は1950年代後半に200トンを超えていたが、現在は１割以下に激減。80年代後半からは20トン前後の低水準で乱高下している。浜名湖周辺もかつては400軒ほどの養殖業者がいたものの、現在は30軒程度にまで減少した。最近では養殖場の跡地に太陽光発電パネルが並ぶようになり、苦境の象徴のようになっている。

日本のウナギ養殖の大半を占めるニホンウナギは11月から翌年４月までが国内の漁期になっている。養殖業者は仕入れたシラスウナギを池に入れて出荷できる大きさまで育てる。養殖は11月から翌年１月末までの漁期前半に取れたシラスウナギを池入れして６カ月程度育てて夏の土用の丑（うし）の日に出荷する「単年養殖」と、２月から４月に採れたシラスウナギを池入れして１～１年半育てる「周年養殖」の２種類がある。

水産庁によると、２月末時点の池入れ数量は4.2トンで、前年同期に比べて約３割にとどまる。周年養殖が主体の中国や台湾などのウナギがあるため「今年の土用の丑の日に極端な供

給不足に陥ることはない」（斎藤健農林水産相）ものの、不漁が続けば2019年の丑の日は十分な供給ができない可能性もある。

　そもそもニホンウナギの資源量は正確に把握できていない。ニホンウナギは日本から約2000キロ離れた太平洋のマリアナ諸島付近の海域で産卵し、黒潮にのって日本や台湾など東アジアを回遊する。ただ、具体的な回遊ルートは判明しておらず、生態も不明な点が多い。そのため、正確な資源量の把握が難しく、漁獲量や池入れ数量をもとに動向を管理しているのが実情だ。

　正確な資源量が分からなくても、シラスウナギが危機的な状況にあるのはおそらく間違いない。14年には国際自然保護連合（ＩＵＣＮ）がニホンウナギを絶滅危惧種に指定した。同年にはニホンウナギを利用する日本と中国、韓国、台湾がそれぞれの国・地域で池入れ数量の上限を設定。日本の池入れ数量は14年の実績から２割減らした21.7トンに決まった。

　ただ、国際協調で決めた池入れ数量の上限に不備を指摘する声もある。基準となった14年の数量は27.1トンで、シラスウナギの当たり年。ある養殖業者は「削減の基準となる年の数量が多すぎる。資源管理を本気でやるなら削減率をもっと厳しくすべきだ」と指摘する。

　高値が続くシラスウナギを巡っては密漁も絶えない。浜松市内のあるタクシー運転手は「漁期以外にシラスウナギを取って小遣い稼ぎをする漁師もいる」と打ち明ける。シラスウナギを確保したい養殖業者にとっては密漁といえども重要な仕入れ先だ。ある漁業関係者は「密漁のシラスウナギを池入れする養殖業者は池入れ数量を報告しない」と話す。水産庁も密漁の存在を認識しているが、シラスウナギの捕獲者は２万人以上にのぼるほか、１人が１日あたりで取る量も数グラムと少量なためすべての密漁を取り締まるのは困難だ。

　日本のウナギ消費は国内だけでまかないきれず、約６割を海外からの輸入に依存する。甘い資源管理が続けば、いつの日か食卓からウナギが消える。

（池田将）

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.